

# フィールドワーク 心得帖

## いつもフィールドに出ていたかった

アジア経済研究所は一九五八年の設立当初より発展途上国に研究者を長期に派遣、現地の人たちとの交流・協働、一次データ・現地語文献の収集、現地語の習得を途上国研究の基本に据えてきました。フィールドワークは所内では「現調」と呼ばれ研究活動には欠かせないツールとなっています。このシリーズでは、各研究者なりのスタイル、心構え、方法などフィールドワークについて様々な話題を提供してまいります。

### ★フィールドワークの夢と現実

ありていに言えば、大学にいた頃の私の夢はイランに行くこと、そしていつか恩師の大野盛雄先生（故人、東京大学名誉教授）のように、いつもフィールドに出てフィールドノートと小さなカメラを手に調査を続けることであつた。一年のうちの少なくとも半分を交通や通信も及ばない遠隔の農村社会や遊牧民社会に身を投じ、いつ果てるとも知らぬフィールドワーク調査を延々と続けることが可能であると勝手に思っていた。

フィールドワークは文字どおり野に出て人々と直接に交渉し、会話と観察と移動の積み重ねの中から自分なりの地域像や文化像を組み立てていく知的な営みのことである。フィールドワークには記録がつきものである。我々はノートやカメラ、録音機材などを持たずにフィールドに赴くことはあり得ない。記

録はどのようなことがあつてもその日のうちか数日中にノートにまとめ、いづれにしてもその記録の蓄積が我々の調査・研究にとつての第一次資料となる。その意味ではそれはルポルタージュや旅行記にも近似しているが、我々のフィールドノートに記される記述は当初から極力個人的な主観を排し、当該社会についての社会科学的な問題意識に基づいた観察と証言によつて構成される。

だが一九八六年にアジア経済研究所に入所し、このようないわば独りよがり思い描いていたフィールドワーカーとしての理想像は、どんなに逆立ちしても実現不可能であることを思い知らされた。まず研究所というところは研究者をそれ程長期期間現地に投入してはくれない。せいぜい一年に数週間の現地調査で「遠隔の農村社会や遊牧民社会」をまともに継続調査するこ

となど到底不可能である。そしてイラン現地側の社会の実態としても、そのような「遠隔地」はこの数十年の間に急速に消失する過程を辿ってきた。

### ★調査の出発点に立つまで

一九八九年から二年間の最初のイラン派遣で、私は調査らしい調査をすることが出来なかつた。甘い見通しでイラン・イラク戦争直後のイランへの滞在を始めたものの、最初の一年間はビザが発給されない状態で過ごし、この間はテヘランを離れて自由に旅行することすら許されなかつたからである。だがこの間に私はペルシャ語の習得に時間を割き、また基本的なペルシャ語文献の収集を行った。ようやくビザが発給された時には語学の習得と文献収集が道半ばであり、これを何とかある程度の区切りまで持ってくるまでの間に滞在期間はそろそろ終わりが近くなつていった。

二年間の派遣期間も終わりに近くなつて、私はイランの国土の背骨とも言えるザグロス山脈を一周する旅に出る計画を立てた。テヘランを九月一五日に発ち、西のガズヴィーンから順次イラン国内の主要な都市を結

んで陸路車で移動していく。北はタブリーズからクルデスタンを南下してアフワーズへ、ブーシェフルからヤースージュへ、シーラーズを経由して南はバンダル・アッバースまで。さらに北上してケルマーンからヤズドを通り、一〇月四日にテヘランに戻ってきた。この旅行を通じて私は東北のホラーサーン地方などを除くほぼ全ての地域を駆け巡り、イランの地方社会についての大きなイメージを得ることが出来た。そしてこれが私にとつてのイラン調査研究の出発点となつた。

だが出発点は所詮出発点ではない。私は自分の思い描くフィールドワーク調査の入りに立つたところでイランから帰国し、その乏しい成果を抱えて次の長期滞在に備えることになった。テヘランでお会いしたときに「私はペルシャ語を本格的に習得する前にフィールドワークに出たことを今でも後悔している」と仰つてくださった大野先生の言葉だけがこの間の私の秘かな支えであつた。

### ★フィールドワークの構想

フィールドワーカーは何よりも自分が現場で直接見たこと、

専門分野はイランおよびアフガニスタンの地域研究。フィールドワークの成果を基に、『現代イランの農村都市』を現在刊行準備中。近著に井上順孝編『映画で学ぶ現代宗教』（共著、弘文堂、2009年）、『アフガニスタンと周辺国——6年間の経験と復興への展望』（編著、アジア経済研究所、2008年）。

聞いたことを第一に信用する。基本的に他人が書いたことや言ったことは信じないのである。この態度は大規模なセンサスや統計調査、文献研究に対しても同様であって、それらを一応読みはするが、自らの議論の最も根幹的な部分について根拠とすることはしない。それがフィールドワーカーと他の社会学者（とりわけ文献家や理論家たち）との最も大きな違いである。

大野先生のイランの農村社会に関するフィールドワーク調査の最初の成果は『ペルシアの農村——むらの実態調査』（東京大学出版会、一九七一年）に纏められた。これはイラン国内の「典型的」とみなされる四つの農村にそれぞれ一定期間住み込んで、各農村社会の社会構造に関わる基本的なデータを提示しようとしたものである。一九六〇年代半ばの当時において、これが外国人（日本人）の個人の研究者がイランの地方農村社会の全体像としてフィールドワークの手法を用いて描き得る臨界点であったことは明らかである。

私は一九九九年からの二年間のイラン派遣に臨むに当たり、

この調査を何らかの点でどうしても乗り越えたいと考えた。そこで私が調査の計画段階から企図したのは、より厳密な意味における広域的なフィールド調査であった。イランでも道路交通網は一九六〇年代からは比較にならないほど行き渡っている。これを利用することによって、数量的に当時では不可能なほどの多数の地方社会を訪れることができるだろう。ただしそれは比較的長期にわたる滞在型の調査と比べて表面的な情報に終始することになる。

こうして私は二回目のイラン滞在中におけるフィールドワーク調査を二段階に分けるという計画を立てた。第一段階においては可能な限りイランの全域において多数の地方都市を訪問し、町の発展の経緯を直接インタビューしてビデオに収める。そして第二段階においてはそれらの中から最も興味深い事例を再訪し、周辺地域との関係を含めてよりきめ細かな調査を実施する。結局私は二年間で一九九〇年代の地方都市を訪問し、その中から三つの地域について継続的に調査を行うことになった。

## ★文献研究の方へ

現在私はようやく調査の報告書をまとめ、出版の機会を待つばかりになっている。だがその間にもイラン国内の変化は刻々と進行し、また私自身のイラン社会に対する関心もすでに次のテーマを模索する段階に入っている。私が現在取り組みたいと考えているテーマは広義のイラン文化圏における家族意識の変遷というものだが、実はこのようなテーマはフィールドワークという手法には馴染まないところがある。イランのような社会において、外国人の男性研究者が垣間見ることのできる領域はおのずと限られており、そこは膨大なペルシャ語の文献資料によって補わなければならないからである。私はこうして現在初めて文献研究の必要を痛感し、フィールドワークから距離を置こうとしている。

だが同時に私がこれから取り組もうとしている文献研究は、これまで自分が行ってきたフィールドワークと切っても切れない関係に置かれることだろう。文献研究といってもフィールドワーカーにしか出来ない切り口があるはずである。そして当然ながら、私はこれまでの

フィールドワークで出来た多くのイラン人の知人との付き合いを可能な限り続けていくだろう。それはかつてフィールドワーカーたらんとした者としての最低限の義務であり、また冥利でもある。

二〇〇九年の六月一二日に行われた大統領選挙をきっかけに、イランは三〇年前の革命以来最大の政治的な転換期を迎えている。日々の政治的な情勢をインターネットで追うことに忙殺されていたある日、イラン南部のシャムサーバードから突然国際電話が掛かってきた。「テヘランじゃいろいろとあるらしいが、こっちは何にもないよ。最近来ないじゃないか、どうしたんだい？」ところで、以前話していたシャムサーバードが市に昇格するという話がようやく実現しそうなんだ。についてはあなたが書いていたという例の報告書だが、役人との交渉が必要になるかも知れないから一部送ってくれないか。」どうやら私は今度イランに行く機会があれば、何をさし置いてもシャムサーバードを訪ねることになりそうな気配である。